

日本生理学会平成14年度各委員会紹介

評議員選考委員会

委員長：貴邑富久子

メンバーは、貴邑富久子、山岡 貞夫、野村正彦（敬称略）です。年一回の学会の前に会議をもち、学会会則内規に則って、評議員申請者から候補者を選考し、幹事会に報告します。内規の、「相当の生理科学の業績発表があり」というところに重みがあると思います。

国際交流委員会

委員長：城所 良明

委員：岡野 栄之 小野 武年
梶谷 文彦 倉智 嘉久
佐々間康夫 野間 昭典
御子柴克彦 水村 知枝
持田 澄子

抱負

昨今外国との交流がさかに行われるようになってきました。生理学の各分野においても研究面、教育面、またはその他の面でも外国の学者と接する機会が多くなっていると思います。インターネットが発達して地球の裏側にいる研究者とも即座に意見の交換ができることは、日本のように地理的に孤立した国に住んでいるものにとって誠に有難いことです。また外国における学会などに出席して、外国人の研究者と個人的に知り合う機会も増えてきました。このような環境下で本委員会が何をすべきかを考えてみますと、研究面においては情報の交換、人材の交流に少しでも力になればと思います。国際生理学会が2009年に日本で行われることが決まり、日本生理学会では準備委員会も発足し万全の体制で準備が進行していますので、当委員会においてはその他諸々の国際会議の

情報収集、そこからのニュースの取得などに努めたいと思います。またそれらの学会に出席される方々のご協力をいただき日本生理学会の活動を世界の生理学者に知ってもらいたいものです。

また生理学の教育に関しては、それぞれの国により力点が異なり、違った工夫をしておられるように見受けます。我が国においては基礎的な神経生理学に従事する人の数が多いのですが、他の諸国、特にアジアの諸国においてはかならずしもそのような傾向はなく、もっと臨床医学に密接した分野に興味が集まっていると考えられます。そこで本委員会のメンバーの方々にも色々な分野を代表する方々に入っていただき、それらの諸国との交流のパイプになっていただきたいと考えております。最後になりましたが、重要な問題です。全世界において、特にアジア、中近東の諸国において、女性研究者の地位が不当に抑えられているのが現状です。我々においてこのような社会的な不正義を是正する行動に出るにとどまらず、諸国における同志との連携をとり、機会を作り主張していきたいと思います。そのために新たに二人の女性研究者に委員として加わっていただきました。何なりとご意見をお寄せいただければ幸いです。

学術研究委員会

委員長 大森 治紀（京都大学）

この委員会は2つの目的を持った委員会であります。第1は科学研究費補助金制度に関わる対応窓口として生理学会の意見をまとめることです。科学研究費制度は、今回総合領域・神経科学においては細目・神経筋肉生理学が2つの亜細目すなわち神経生理学と筋肉生理学に分けられたこと、さらにそれぞれの細目・亜細目のキーワードが審

査委員の選定に際して添付を求められることなど、着実に変遷しております。こうした変化に生理学会としての意見をまとめ対応するのが学術研究委員会の1つの役割であります。この点に関しましては前委員長の小澤瀨司先生の努力により、新しいキーワードセットも作成され、次の学術研究委員会で討議し、常任幹事に諮る手はずとなっております。

新しい委員会では、こうした制度上の問題に対応することと共に、生理学会を活性化する上で、科学研究費に関して学会としてさらに何ができるかを考えてみたいと思います。1つの可能性は、委員会の目的の第2項にも関わりますが、生理学分野が中心となって特定領域研究を進めることのできる分野を開拓することです。すなわち生理学会でシンポジウムを提案することなど、新領域の発足を生理学会として積極的に支援することも、委員会の活動として可能であろうと考えます。

委員会の第2の目的は、生理学会の年次大会を支援する事です。生理学会は伝統的に当番幹事によって年次大会のすべてが企画され運営されて参りました。しかし、第79回広島大会から学術研究委員会の委員がプログラム委員会に参加することとなりました。目的とするところは学会として継続性のある考え方で年次大会を企画・運営し、生理学会を活性化したいということであり、しかし、本委員会に新しく付け加わりましたこの使命に関しては、委員会内部でもまだ十分な議論は進んでいません。広島大会では、特別講演演題の選定などで委員会として働くことはできましたが、今後、具体的にどのようにして年次大会を活性化していくのかを、系統的に考え・提案していく必要があります。2009年開催のIUPS日本大会を考えますと、おのずから生理学会大会はより国際的であり、さらに国内的にはより学際的

である必要があります。そして、大学院生を始めとする若手の研究者に自分の研究発表のためのメジャーな学会として認識してもらえるようになることが、生理学会そのものの活性化につながることを考えます。国際化の目標には、外国からの参加者にも理解できる大会とするために大会発表を英語で行うことを考え、具体的にどのようなプロセスで英語発表を実現していくのかを議論し、年次計画の時間表を提案したいと考えています。学際化には生命科学に関連する学会との相互交流を実現することを委員会で議論し、具体的なシンポジウム提案として用意して年次大会のプログラム委員会に積極的に加わっていくことを考えています。会員の先生方、国際化と学際化に関して、さらに具体的な思いつきがありましたら、私宛e-mailでご連絡下さい：ohmori@nbiol.med.kyoto-u.ac.jp。

本委員会のメンバーは今回、常任幹事の選挙制度の改正に対応して、大幅に若返りました。一部の委員には役割に重複もありますが、委員会には次のような人たちが加わっております。当該年度の大会の当番幹事（今永一成 福岡大学）、次年度の大会の当番幹事（青木 藩 札幌医大）、IUPS学術委員会委員長（倉智嘉久 大阪大学）、将来計画委員会委員（久保義弘 東京医科歯科大学）、教育委員会委員（佐久間康夫 日本医大）、前学術研究委員会委員長そして生理研連委員（小澤瀨司 群馬大学）、そして非常に近い生命科学領域である生物物理学分野（石渡信一 早稲田大学）からも委員会に加わって頂いております。大変重量感のある委員会ではありますが、それぞれの委員のもつ経験と見識とから、科学研究費問題および生理学会大会を活性化するための具体的な議論を進めていきたいと考えています。